

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

私にとっては、まったく我がことでした。と申しますのも、私も同じ生まれ、同じ女学生で、同じ生徒でした。たまたま原爆が落ちたのが、私の働いていた横浜でなく、千恵子さんの働いていた長崎だっただけの違いで、以後五〇年近くにわたる肉体的、精神的千恵子さんの苦痛を思うとき、私は居て

ことしもまた、熱い涙を胸いっぱい呑みこみながら「悪魔の核兵器を一日も早く、一発残らず、この地球上から廃絶しなくては」の決意をかためて、原水爆禁止一九九三年世界大会の旅から帰ってきました。あの「ピカ」から四十八年も経っているのに、いまだに被爆者のうったえは、涙なしには聞けません。とりわけことしは悲しい、苦しい夏でした。日本はもとより世界の核被害者の証人として、生き続けてほしかった長崎の渡辺千恵子さんが、この三月亡くなられたからでした。十八歳の時、女学生だった千恵子さんが、軍需工場へ学徒動員させられていた朝、原爆投下の犠牲となり、以来二度と歩けない体となりました。

耳から離れない核実験被害者のうったえ

守谷 武子

も立ってはいられない思いでした。こんど渡辺千恵子さんの歩みを描いたビデオ「見上げれば、ひまわり」千恵子さんとともに」の上映で、千恵子さんがあの苦しみを乗り越えられたのは、原水爆禁止世界大会の積み重ねと共にあったのだとわかりました。また、ことしは被爆者松谷英子さんのうったえに、日本政府の非情さをあらためてみせつけられました。三歳半のとき爆心地から二・二キロ地点で被爆。縁側でニワトリと遊んでいた英子さんは、落ちてきた原爆かわらで頭に傷をおい、手も足もブラブラになり、以後今日に至るまで歩行が不自由です。被爆者として認めよという松谷さんの提訴に、ことし五月長崎地裁は、英子さんの請求を全面的に認めたのに、厚生省は地裁の判決を不服として控訴。裁判は福岡高裁に持ちこまれています。被爆国日本の私たちは、これまで被爆者を先頭に遊説団をたくさんの国々に送ってきました。しかし近年明らかになってきていることは、核保有国の核実験被害のすさまじさです。その実体は自国の国民も、従属化している国

々の人びとをも、どれだけ犠牲にしてきたことか。

一九五四年三月一日、アメリカ政府がビキニ環礁でおこなった水爆実験は、第五福竜丸に死の灰を降らせ、九月二十三日に久保山愛吉さんの命を奪いました。その水爆実験はまたロンゲラップ(マーシャル諸島)の人びとをも苦しみのどん底につき落としました。またフランスに占領され、三〇年近くも核実験場にされてきたポリネシア。旧ソ連の核実験で百万人が放射線をあびたカザフスタン共和国の人びとのうったえが、いまも私の耳から離れません。核兵器にしがみつ়く権力者のなんと残忍なことか。アメリカをはじめ「核抑止力」者がこの地球上に、まだ広島型原爆の四〇〇五〇万発も保有していることを、鋭く告発し、日本の米軍基地が強化されている実情で、どうして「冷戦」が終わったといえるのか。核兵器の使用、実験、研究、開発、生産、配備、貯蔵などのいっさいを禁止する「核兵器全面禁止、廃絶国際条約」の締結を断固として要求する。とした「広島宣言」を実践する壮大なうねりを起こしていくことの大切さを身にしみて感じる今日このごろです。

(日本婦人団体連合会副会長)

高校生大いに「勉学」

ビキニの水着こそ見えませんが「海とクルーザー」を望む展示館前の広場に、日光浴の若者の姿も多くなった夢の島の夏。今年はずっとかわって太陽の少ない日々でしたが、展示館はレポート用紙とイ

土門拳の写真に…

九月一日、一人の広島被爆者が展示館でその思いを語った。広島ワールド・フレンドシップ・センターで、自らの被爆体験を子どもたちに語り続ける山岡ミチコさん。



写真を前に語る山岡ミチコさん

熱い八月の展示館—— スタントカメラを持った高校生が「勉強の場」でもありました。夏休みとともに、埼玉・千葉・神奈川県から十数校の高校生が連日、数人のグループで来館、船を見上げ写真を撮り、説明文をメモ

することに驚き「いつかいつかみたいと思いつけ、やっとなんか実現したい」とのこと。アメリカから高校生を招き、展示館、原爆の図丸美術館から、広島を巡る旅を進めている日米文化センターの三人の女子大生の案内で、少し不自由な足をかばうように、ゆっくりと館内を巡った。

し、レポート用紙に宿題の「解答」を書き込みます。

広島・長崎への修学旅行の事前学習の高校もあり、机の上いっぱい本を広げて学習するグループが多く、夏休みの終わり近く東京を襲った猛烈台風で交通も寸断され、来館者わずか四名という珍

女学校の生徒で、爆心から約八〇〇メートルで被爆し重傷を負った。ビキニ事件翌年の一九五五年、二十五名のいわゆる原爆乙女として手術のため渡米。一九五七年はじめて広島に土をふみ、「憑かれたように広島に通いつづけた」土門拳は、山岡さんにもレンズをむけた。

「土門さんは何度も何度も訪ねてこられ、私は四回目にやっとカメラの前に立つことを承諾しました。丸二日、五十本近くも撮影されたでしょうか。大きく開かれた輝くような瞳、押さえに押さえられた願いがもれてくるような口元。『原爆乙女』題したこの山岡さんの写真に土門拳は「言語に絶する屈辱に耐えた精神力、幾度も死生の間をくぐりぬけてきた生命力の強さ」と記していた。いのちあるかぎり若い人たちに広島を語り続けたいと願う山岡さんの強い意思を改めて見る思いがした。

く静かな日も、その全員が高校生で、朝から夕方まで終日「勉強」にいそしみました。八月六日・九日に前後して、JR東日本労組千葉支部など団体の見学もさかん。おりから発行された久保山さんの半生記を読んだ、たまたまなくなって来ましたが、この静岡清水市の婦人の来館や、和歌山の船大工南藤藤夫さんの息子さんが家族全員で来館するなど、熱い思いがいっぱいの展示館でした。

長崎国際文化会館からの視察も八月末、「広島の上演委員会」の栗原千絵子さんが、平和と軍縮をめざす全国連絡会の青年の案内で来館。先に上演され話題になった広島原爆ドームのヤン・レツルにちなんだ演劇「螺旋階段」(村井志摩子演出)の反響を語り、海外上演を通じもっともっとと世界に被爆の実相を伝えていきたいなど抱負を語りました。

また、長崎国際文化会館の西崎武博次長、永田博光氏が展示館を視察、「実に印象深い展示館ですね」と見学しながら、いま全面改装中の国際文化会館の三年後開館の構想を語り、ビキニ被災40周年から被爆50周年の事業についても交流しました。

連載・ヒロシマ・ナガサキ修学旅行を手伝う②

まず下見に、被爆者の思いを受け止め 心に刻む

江 口 保

広島修学旅行を始めてから二十
年近くになる。最初はその数も少
くしかも手探り状態であった広島
修学旅行も、今では三倍程にもな
り、旅行者もその斡旋をする程
になった。それは嬉しいことでも
ある。少しでもヒロシマに触れる
ことは全くのゼロではないと思う
からである。そこから新しいもの
が芽生えるかもしれないという期
待も持つことが出来るのである。
だがしかし、少し意地悪な言い方
をすれば、観光化したいわゆる商
業ベースに乗った広島修学旅行が
その大半を占めるまでに至った今
日の広島修学旅行は余りにもマン
ネリ化している。そこには思想性
が見ることが出来ないから、その
うちに雲散霧消してしまうのであ
る。

「広島修学旅行も十数年に及び、
県内でも古い方なのですが、平和
公園での時間は二時間程度で資料
館と式典のみの取り組みのまま
です。」
そして、更に次のように続く。
「いや、その取り組みの事が問
題なのでなく、『従来通り』、『去
年と同じ』という教師側の取り組
みの姿勢が問題だと思っております。
私達のブロックの七つの中学校の
中で、広島から別方面への修学旅
行に戻る学校が数校出てきていま
す。そしてその理由が『まんねり
という事だ』と聞いています。私の
学校もこのままだと……という気
がします。『通信』の中に『旅行
社まかせの修学旅行にならないよ
うに』という旨の文章がありまし
たが、私たち現場の教師が肝に銘
じなければならぬと、あらため
て感じています。」
私はいつも「教師がまず広島に
感動しなければならぬ」と話す

ことにしている。感動はもちろ
ん広島に限ったことではない。そ
も教育という作業には常に感動
という心がなければならぬと思
うし、現在の教育、いや教育だけ
でなくすべてが、感動がないまま
に押し流されているようではなら
ない。
文書や映像で広島を学べば、知
識としての理解は得られるが、自
分を突き動かすに足るエネルギー
にはなりにくい。しかし、被爆者
を前にして話を聞くと、特に現
地広島で臨場感あふれる被爆者の
話を聞くと、被爆者の証言に引
き込まれ、一緒にあの日をさまよ
っているような自分を発見するの
である。そして一緒に涙しながら、
新しい怒りが込み上げてくるので
ある。そして、この打ち震えるよ
うな感動を是非子どもたちにも伝
えなければという思いに至るので
ある。

そのような過程を踏むことがあ
ってはならない。
そのような過程を踏むことによ
って、広島修学旅行の核心がつかめ
、その全体像が自ずから浮かん
でくる。もちろん、その中で事前
に取組むものや事後に取り組むもの
も見えてくるのである。教師の広
島への熱い思いがあれば、子ども
たちはそれを敏感に受け取って
くれる。ということ、どのような
下見をするかが広島修学旅行の成
否を決めるものである。であるか
ら、なるべく時間をかけて、一人
ひとりの被爆者とじっくりと語り
合うような下見であって欲しい。
中学生であった子どもたちの名前が
刻まれた本川沿いの慰霊碑に、毎
月の命日にはお参りを欠かさな
った年老いた母親が、この夏にまた
一人亡くなった。広島は次第に、
そして確実に遠くなりつつある。
「広島」の継承は、急がなければな
らない」と痛切に思うこの頃であ
る。文中の『通信』とは、私が
時々出している『ヒロシマ・ナガ
サキ修学旅行を手伝う会通信』の
ことV。
(ヒロシマ・ナガサキの
修学旅行を手伝う会)



当時の生活用品や教科書、戦時中たべた雑穀類も展示

十四回目をむかえた 「大田平和のための戦争資料展」

飯 村 提 一

一九八〇年、『戦ふ兵隊』とい
う自主上映の映画を見た人達の合
評会の中から「私達にも何か平和
への訴えをすることはできないか」
という声が起こり、京都や大阪な
どで開かれていた「戦争資料展」

はできないか、との提起があると、
気の早い人達から続々と戦時中の
遺品や資料が寄せられてきました。
そこで相談し合った人たちが実行
委員会準備会が組織され、八月の
終戦記念日を中心とした「平和の
ための戦争資料展」への
取り組みが始められました。

準備会の議論も夫々の
立場から「日清・日露戦
争から……」「日中戦争か
ら太平洋戦争まで……」
「朝鮮戦争……」「ベトナム
戦争……」と展示内容へ
の強い要望が百出して、
まとめるのに一苦労しま
した。

とにかく、集まった資
料は全部展示することを
念頭に、明治維新以降の
年表を作成して全会場に
張りめぐらし、関連項目

に合った資料を添えていくとい
うにぎやかな展示となりました。

東京・特に南部地域では初めて
の企画といえる物珍しさもあつ
た、連日押すな押すな入場者に
主催者としてはビックリするやら
ホッとするやらでした。

しかし、満ち足りた時代での
「戦争」を見る人々が懐古談に花
を咲かせる場面や、どうしてもピ
ンとこない若い世代への解説に苦
労する場面もあって、実行委員は
勉強させられました。寄せられた
アンケートには「今後是非続け
て欲しい」という要望が数多く、
二回目以降も開催する責任を負う
形になりました。

第二回目からは一つの大きなテ
ーマを掲げました。例えば「学童疎
開」「大田区の空襲」「核廃絶」
等、重点的な展示に併せて『十五
年戦争』の歴史を必ず振り返るこ
とで、反省への意志表示と平和へ
の願いを込めた決意を訴えたつも
りです。

とにかく「平和への願いを込め
たささやかな灯を消さない為に」
を合言葉に、高齢化や転居、転職
等で実行委員会から去る人が増え
る中で、今年も第十四回目を開く

ことができました(八月十二日、
十五日、大田区民プラザ)。国際
情勢や政治環境が変化する中で、
今年も昨年よりも多くの人が観に
来てくれました。
今年の展示は、改憲の動きが目
立ってきたことを感じ、さまざま
な角度から憲法問題を取り上げて
みました。「旧帝国憲法との比較」
や「各国の憲法にみる平和条項」
紙芝居による「日本国憲法のはな
し」など、「物」による展示が難
しい「読んでいただく」展示とな
りましたが、中・高校生を含む多
数の若い人達が熱心に見ていた
けたことに主催者として感激しま
した。

私達の実行委員会は、戦時下の
現物資料(軍服類、日用品、戦争
遺品等)約百点、四ッ切白黒写真
(解説付)約七百枚などを保有し
ています。これらは各地のミニ資
料展や、中学、高校の文化祭など
に無料で貸し出して活用されてい
ます。ただ、年々損傷が進んで、
保存・維持に苦慮しているところ
です。そして、私達実行委員を引
き継いで運動を継続してくれる人
達を待ち望んでいます。
(大田平和のための戦争資料展実行委員会)